

子ども図書研究室だより

令和 7 年度 4 月～9 月にかけて行った事業について、報告します。

子ども図書新刊紹介

子ども図書研究室の全点収集資料から、子どもたちに手渡したい資料を中心に紹介する会です。令和 7 年度第 1 回は 8 月 2 日（土）に対面式で開催し、後日 Youtube の配信も行いました。以下の内容で第 2 回の開催も予定しています。

第 2 回 子ども図書新刊図書紹介

場 所：静岡県立中央図書館

時 間：令和 8 年 2 月 25 日（水）

10 時から 11 時 30 分まで

会 場：当館 中集会室または会議室

募集開始：1 月下旬

動画配信：令和 8 年 3 月 14 日（金）から
4 月 30 日（木）まで

第 2 回目は 8 月以降に選定した本を紹介します。申し込みは 1 月下旬から、新しい子どもの本を知る機会、また図書館や学校で選書に悩んだ際の参考にしてください。

「子ども図書研究室」って？

子ども図書研究室は子どもの読書活動に携わる大人の方を対象とした研究施設です。15 歳以上（中学生を除く）の方がご利用いただけます。

当研究室では出版されている児童書・絵本を可能な限り全点収集しています。児童書の調査・研究、旧版と新版の読み比べ、調べ学習で使う資料を探すなど、多様な目的で活用していただけます。児童書に関してのレファレンス（調査・研究のお手伝い）も受けています。お気軽にお問い合わせください。

子どもにおすすめの新刊書を紹介する「選定図書リスト」をウェブサイトで公開中！
ご家庭や文庫、学校図書館、公立図書館などの状況に応じてご活用ください。

子ども図書研究室講演会

豊かな心を育む絵本の世界

開催日：令和 7 年 7 月 15 日（火）

会 場：ライブ配信

参加者：4 名（会場）、34 組（ライブ配信）

配 信：令和 7 年 7 月 29 日～10 月 31 日

再生数：921 回

令和 7 年度子ども図書研究室講演会は、長年保育の現場に携わってきた瀧薫氏（社会福祉法人子どものアトリエ理事長、大阪芸術大学短期大学部教授）を講師にお招きし、「豊かな心を育む絵本の世界」と題し、絵本が子どもの心の発達に与える影響について、



様々な絵本を実際に読み聞かせしていただいたり、わらべうたの実演もしていただきながらご講演いただきました。ここでは講演会の概要を報告します。

『保育と絵本
発達の手引きにそった絵本の選び方』
瀧 薫／著（エイデル研究所）

絵本は心の栄養

絵本は、地域や時代を超えて多くの子どもたちに親しまれてきた。好きな絵本、思い出の絵本と聞いて『ぐりとぐら』（福音館書店）、『はらぺこあおむし』（偕成社）等、多くの人が思い浮かべる、共通の経験を持つ絵本がある。

子どもたちは絵本が大好き。保育指針や幼稚園教育要領にも絵本は心の発達を支えるために大切な要素だと書かれている。保育の現場でも乳児は保育士と 1 対 1 で、成長すると友だちと一緒に絵本を楽しむ姿が見られる。

絵本は「声の文化」と呼ばれ、この「声」とは愛情の体験でもある。絵本は子どもの心の発達に寄り添うことができる。



赤ちゃん期

赤ちゃんはリズムのある言葉で声かけをする
と興味を持ち、大人の顔を見るようになる。リ
ズムのある言葉は、お腹の中で聞いていたお母
さんの心臓の鼓動のように安心感を与える。ま
た、視力が未発達なため、赤や黄、青などの色の
コントラストが強い方がよく見える。

長年親しまれ、ブックスタートでも使われる
ことの多い『じゃあじゃあびりびり』（偕成社）
『ぐぶぐぶ ごぼごぼ』（福音館書店）は、リズム
のある言葉と、色が鮮やかではっきりした絵で
作られ、赤ちゃんを自然と絵本の世界へ引き込
ませる。子どもの心をよく考え丁寧に作られて
いることがよくわかる。

生後7、8ヶ月くらいになると、おもしろい
と思ったり好きなページを読んでもらったとき
に読み手の顔を振り返るようになる。他者との
関係を意識し始めるこの時期は「いないいない
ばあ」型の絵本がとても好まれる。『いないいな
いばあ』（松谷みよ子/ぶん 童心社）はページ
をめくるたびに世界が変わるが、目と目を合わ
せる体験ができるのが魅力である。近年では『み
んないいおかお』（福音館書店）のように、目と
目を合わせることで存在を肯定する絵本も登場
している。

言葉を覚え始める頃には、『くだもの』（平山
和子/さく 福音館書店）のような絵本で、美味
しそうに食べる真似をしたり人にあげるそぶり
をみせる。これは象徴機能（目の前にないもの
を言葉や記号、イメージなどで表現する能力）
といって、言葉の発達に深く関わる力である。
とはいえ絵本の楽しみ方は一人ひとり様々。発
達には個人差があるため、言葉がまだ出なくて
も、絵本を通した体験で心の泉は育っている。
その子の楽しみ方を身近な大人も一緒に楽しん
でほしい。

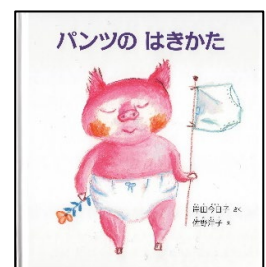
2～3歳期 — 「自分でできた」を応援する

2歳頃は「いやいや期」とも言われるが、これ
は自己確認の時期である。自分を表現し、主張

することが大切であり、自我が育っている証拠
である。また、この時期には仲良しの友だちが
でき一緒に遊ぶ姿がよく見られる。

この時期は、読んだ後に子どもが「もう1回」
と持ってくるものが多い。代表的な例として、
『しろくまちゃんのほっとけーき』（こぐま社）
や『わにわにのおふろ』（福音館書店）、『パンツ
のはきかた』（福音館書店）がある。この3冊は
主人公が人間ではなく動物という共通点があり、
子どもは親しみを持つ。また、大人の力を借り
ずに自分でやり遂げる姿が描かれており、子ど
もにとって「自分でできた」という喜びを体験
できる内容である。

『パンツのはきかた』では、ブタの子が一生
懸命パンツを履く様子が描かれ、最後は裏返し
でもご機嫌で出かける。子どもにとって大切な
のはパンツの裏表ではなくて「自分でできた」
ということ。完璧でなくても大丈夫、自分でで
きたという気持ちを応援しているこの絵本は、
親が子どもを見守る姿勢の大切さも教えてくれ
る。絵本はしつけをするのではなくて、子ども
が身近な大人と読むこと
で同じ方向を見ること、
大人も子どもと共に絵本
を楽しむことが大切。子
どもにとって絵本の時間
が幸せな時間となり、
その積み重ねが、将来、
自分らしく生きる幸せ
につながる。



『パンツのはきかた』
岸田 今日子/さく
佐野 洋子/え（福音館書店）

この時期、2歳頃は「あれなに？」「これなに？」
と質問する知りたがり屋さんが多く、3歳頃
になるとさらに「なぜ？」「どうして？」と質問を
繰り返すようになる。また、お手伝いが大好き
になる時期でもある。もう赤ちゃんじゃないよ、
大きくなったよ、なんでもできるよと子どもは
思っている。この勘違いは大切で、たとえ大人
から見るとお手伝いが役に立たなくても、お手
伝いはどんどんさせてあげてほしい。

このことを描いた『おでかけのまえに』（福音

館書店)では、主人公のあやちゃんはピクニック前に一生懸命お手伝いをするが、結果的に散らかしたり用事が増えたりする。しかし、絵本の中では叱られず、子どもは安心して楽しむことができる。3歳頃は自我が育ち、親と自分は別の人格であることを意識するが、無意識の部分ではまだ不安も多い。この時期の絵本は、子どもの気持ちに寄り添い、安心感や心の安定を支える役割を果たす。

子どもが何回でも読んで欲しがる絵本に『きんぎょがにげた』(福音館書店)がある。金魚の行方をさがすこの絵本は、子どもは読みながら「思った通りだ」「ほら、やっぱり!」と安心する。何回も読んで欲しがる絵本は、子ども自身がその時期に必要なことがつまっている。この時期の絵本は、年齢よりも子ども自身の興味や発達に合わせて楽しむことが重要である。

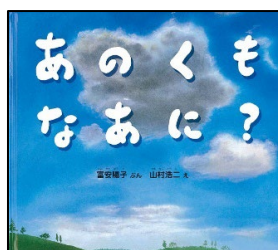
4歳期 — 自意識と想像力

4歳は乳幼児期の中でも精神的な発達の節目であり、自意識が芽生える時期である。他者から見える自分の姿を意識し始め、不安や葛藤を経験し、精神的に成長していく。この時期は想像力が飛躍的に高まる時期でもある。現実ではできないこともイメージの中で自由に表現し、忍者ごっこや魔法使いごっこのような遊びに夢中になる。こうした「なりきり」遊びは、心の発達にとって大切な体験であり、想像の力を借りて自信や安心感を育てていくことにつながる。ファンタジーの物語、例えば『かいじゅうたちのいるところ』(富山房)や『めっきらもっきらどおんどん』(福音館書店)では、現実と空想を行き来しながら、心の中で冒険し、安心して帰ってこられる「生きて帰りし物語」が子どもの成長を支える。

昔話には、子どもの成長を願う深いメッセージが込められている。トロルや山姥、狼といった怖い存在を通して、困難を乗り越える力や勇気を学ぶ。『三びきのやぎのがらがらどん』などは、発達の節目を象徴する物語ともいえ、子ども

もが親を乗り越えて成長していく姿を読み取ることもできる。昔話は子どもの未来への祈りであり、語りの文化として大切に受け継がれてきたものである。安易にストーリーや結末を変えることなく、誠実に丁寧に語り継いでいきたい。

科学絵本もこの時期に楽しむようになってくる。『あのくもななに?』



『あのくもななに?』
富安 陽子/ぶん
山村 浩二/え
(福音館書店)

る。『あのくもななに?』(福音館書店)は、雲が何に見えるのか想像する楽しみが描かれる。知識として説明せず、親子が同じ方向を見て(共同注視)、親はじっと待つことで、子ども自身のイメージが自然に湧き出る。

この体験が、探求心や科学的好奇心の芽を育むことへ繋がるのである。レイチェル・カーソンの言葉に「知ることは、感じることの半分も重要ではない」とあるように、幼児期には知識を伝えることよりも豊かな好奇心を育むことが大切である。それは探求心や創造性の基礎となり、学びに向かう力を育む。

5～6歳期 — 思考力の深まり

『はじめてのおつかい』(福音館書店)は、5歳のみいちゃんがはじめて一人で牛乳を買いに行く。近くの店に行くだけの簡単な用事のはずが、さまざまな困難に遭遇する。途中で転んだり怖い思いをしたりしながらも、最後には自分の力でやり遂げる。子どもは、ただ一人でできるようになりたいのではなく、その努力を「見てほしい」「聞いてほしい」と願っている。お母さんが最後に静かに話を聞いてくれている場面はとても素晴らしい。

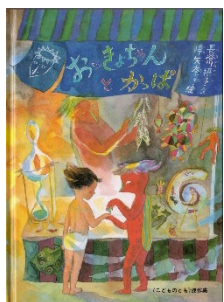


『はじめてのおつかい』
筒井 頼子/さく
林 明子/え(福音館書店)

子どもは主人公に同化して絵本の世界を体験する。未知の世界や困難に直面しても、読み手の大人と一緒に安心して冒険することができ

る。これが絵本の良さではないだろうか。

『おっきょちゃんとかっぱ』(福音館書店)は



『おっきょちゃんとかっぱ』

長谷川 摂子／文

降矢 奈々／絵 (福音館書店)

おっきょちゃんが、かっぱの子に誘われて川の底の祭りへ行く。やがて人間の世界を思い出し、スイカごめの呪文で家へ帰るというお話である。

ここで描かれているのは、子

どもの心の成長で

ある。暗いところ

をくぐって再び光

の中に出てくる姿は、まるで死と再生の物語のようである。おっきょちゃんを危険から救ったのは、生活の知恵とお母さんへの愛着であった。幼い日に受けた愛情が、子どもを呼び戻す力になったのだ。就学を控えた子どもたちもまた、不安と期待の中で成長していく。この絵本は、子どもの思考力の芽が育つ時期に寄り添う一冊である。発達の階段を登る子どもの手を引くのではなく、その“かかと”をそっと支える。主体はあくまで子どもである。

子どもの幸福度と絵本の役割

ユニセフによる「子どもの幸福度ランキング(2025年5月公表、対象43カ国)」によれば、日本は14位(前回20位)である。日本では医学の進歩により超未熟児も育つことなどから身体的な面では世界トップ。また、学力やスキルも向上(12位)しており、非認知的スキルも含めて、教育面でも改善が見られる。

しかし一方で、精神的幸福度は極めて低い。身体的な部分や学力スキルと比べると、若い世代の自殺率の高さなどからも、日本は「パラドックス(逆説)の国」と言われることがある。客観的には恵まれているはずなのに、本人たちは幸せと感じていない現状がある。このような背景から、子ども家庭庁は令和5年12月に今後5年間、愛着形成を保障し、心の基地や安心感など、精神的な育ちを大切にすることを打ち出した。

絵本は、人の声の心地よい体験や喜びの共有

を通して、子どもの「心の基地」となり、発達を支える役割を果たす。そのため、絵本は文字を教えたりやしつけをするためではなく、共に楽しむことが重要である。

絵本の読み聞かせには心の成長を支える次のような役割がある。

1. 親子の絆を深め、心を育てる時間

愛着形成・安心感・自己肯定感・信頼感を育む。読み聞かせをする時間で大人も心を落ち着かせることができる。

2. 思考力・想像力を深め、創造性や表現力を育む

本物にたくさん出会うことで表現力が豊かになり、非認知的能力、思考力の深まりや協同性、自立心、豊かな感性と表現等が育つ。特に乳幼児期に育むことが大事だとされている。

3. 多様な価値観・文化・感情を体験する

いろいろな国や文化が混じり合う中で、他者と良好な関係を築くコミュニケーション能力を育むことができる。

4. 学びに向かう力の土台を作る

興味や好奇心を育み、知ることは楽しいと実感できる。子どもは本来、知りたがり屋である。好奇心をのびやかに育てることが将来の学びの土台を作る。

保育や子育ては未来を見据え、伝承を守りながらも新しいエビデンスを取り入れ、アップデートしていったほしい。

絵本は単なる読み物ではなく、子どもたちを物語の世界へと導く語り手であり、心に残る体験そのもの。多くの人の手によって受け継がれてきた「物語を届ける文化」をこれからも絶やさずにつないでいきたい。

幼い日に、大好きな人の優しい声で絵本を楽しむ、想像の世界に浸り込んだ体験は、愛情の記憶としてその子の生涯を支え続ける。幼い子どもとのそばにいる方は、これからも子どもたちと一緒に、楽しんで歩んでほしい。

(文責 眞子)

新刊児童図書出張展示

開催日：令和7年9月17日（水）

会場：藤枝市立駅南図書館

参加者：27人

新刊児童図書出張展示研修会（旧巡回展示研修会）は、新刊約1000冊を展示し、職員が近年の出版傾向や選定した知識の本、読み物、絵本の中から注目の作品を紹介しています。令和7年は戦後80年ということもあり、戦争関連の図書が多く出版されました。今回取り上げた図書を紹介します。

	書名	著者名	出版社
知識	わすれないヒロシマナガサキ 原爆はなぜ落とされた	安斎育郎／文 監修	新日本出版社
	一郎くんの写真 日章旗の持ち主をさがして たくさんのふしぎ傑作集	木原育子／文 沢野ひとし／絵	福音館書店
	子どもも兵士になった 沖縄三中学徒隊の戦世	真鍋和子／著	童心社
	いま、日本は戦争をしている 太平洋戦争のときの子どもたち	堀川理万子／絵と文	小峰書店
	広島の木に会いにいく 被爆樹木が見る未来 （新版）	石田優子／著	偕成社
	小学生記者がナガサキを記事にする みんなに伝えたい戦争や原爆のこと	前田真里／著	くもん出版
読み物	「戦争文学セレクション 戦争がわたしたちを見つめている」シリーズ	宮川 健郎／編	汐文社
	「未来に残す児童文学作家と画家が語る戦争体験」シリーズ	あかね書房／編	あかね書房
	ミハイルのハーモニカ	高橋良子／文 金子恵／絵	文研出版
	ひろしま絵日記	中澤晶子／作 ささめやゆき／絵	小峰書店
	彼岸花はきつねのかんざし 新版	朽木祥／作 ささめやゆき／絵	佼成出版社
	Garden 8月9日の父をさがして	森越 智子／作 大野 八生／絵	童心社
	灰とダイヤモンド	東 曜太郎／作 中島 花野／絵	岩崎書店
	君のせいだ、涙がでるのは。＊	林けんじろう／著	くもん出版
	ペンツベルクの夜＊	キルステン・ボイエ／作 木本 栄／訳	静山社
	わたしの町ナガサキ 原爆を生きのびた柿の木と子どもたち＊	キアラ・バツゾーリ／作 アントン・ジョナータ・フェッラーリ／絵	エ芸図書
＊研修会では紹介しませんでした戦争関連の図書のため追記します。			
絵本	野ばら	小川未明／著 あべ 弘士／絵	金の星社
		小川未明／著 淵／絵	汐文社
	Dear 16 とおりのへいわへのちかい	サヘルローズ／[編]著	イマジネーション プラス
	やくそく ぼくらはぜったい戦争しない	那須 正幹／さく 武田 美穂／え	ポプラ社
	くらげのパポちゃん	かこさとし／文 中島 加名／絵	講談社

その他、知識の本は「きょうだい児」「ロボット関連」、読み物は「死がテーマの文学」、絵本では「伝記絵本」「グリーンケアの絵本」の図書を紹介したほか、新訳や改訂等も紹介しました。

知識



『まぼろしの動物ニホンオオカミ 小学生、なぞのはくせいの正体を追う』
たけたに ちほみ／文
川田 伸一郎／監修
坂口 友佳子／イラスト
Gakken 2025 年 6 月

小学4年生の小森日菜子さんは国立科学博物館の見学でイヌのような剥製「M831」に出会う。

「M831」が、大好きな「ニホンオオカミ」の剥製では？と考え質問すると「ヤマイヌの一種で、上野動物園で飼育されていた可能性がある」との回答。「もしかして、博物館でも正体はわかっていない？」。得たヒントを手掛かりに日菜子さんは謎の解明を決意する。文献を遡り、研究者の助力も得ながら研究を進め、論文を発表するまで取材したノンフィクション作品。「好き」を原動力に「M831」の正体に迫る過程が熱意と共に描かれる。【小学校高学年から】(上村)

読み物



『まだまだ ここから』
宇佐美 牧子／作
酒井 以／絵
ポプラ社
2025 年 5 月

小学4年生の蓮(れん)は、運動は得意ではないけれど「水泳」だけは自信があった。スイミングスクールの特訓生になる為に一生懸命練習したけれど、選ばれたのは弟の凜(りん)だった。挫折感や弟に対する妬ましさなど胸中にモヤモヤを抱える蓮。そんな時、市民プールで「すいすい川原クラブ」の募集を知る。テーマは「トライ」。コーチや新しい友達との出会いと交流を通してそれぞれの「水泳に対する想い」を知り、また両親や弟の考えや思いに触れることで水泳に対する楽しさが甦る。蓮の心の成長の物語。【小学校中学年から】(三枝)

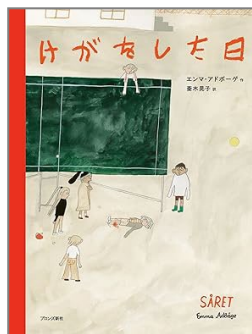
読み物



『ペンツベルクの夜』
キルステン・ボーエ／作
木本 栄／訳
静山社
2025 年 5 月

1945 年 4 月 28 日、ドイツの敗戦は既に濃厚。炭鉱の町ペンツベルクでは、反ナチの元市長ルンマーがヒトラーの焦土作戦から町を守るため数人の同志といち早く行動を起こす。しかし国防軍により国家反逆罪で処刑され、さらにヴェアヴォルク(人狼部隊)が反体制とされる人々を殺戮。一夜にして市民 16 人が粛清された。ドイツ国内でもあまり知られていない実際の事件を、裁判記録をもとに架空の少年少女の視点から描く。救いのない結末に現実の恐ろしさを感じると共に、現在の社会や自身を振り返る機会に。ドイツ文学賞受賞。【中学生から】(眞子)

絵本



『けがをした日』
エンマ・アドボーゲ／作
菱木 晃子／訳
ブロンズ新社
2025 年 5 月

小学校の休み時間、「ぼく」は校庭の隅にあるピンポン台の上からふざけてジャンプ。ドンという音を聞きつけて校庭中のみんなが集まってきた。ぼくの膝からは真っ赤な血が流れ、注目の的。それから、何度も事故のことを聞かれたり、両脇から抱えて運んでもらったり。傷が治ってくると、大きなかさぶたを見せて得意げだったが、ついに剥がれる瞬間がやってくる。誰もが経験したことのある、注目を浴びる気持ちと不安を等身大に描く。スウェーデンのゆとりある校風も味わえる。スウェーデン年間最優秀絵本受賞。【小学校低学年から】(前林)